

「国民食」インジェラと食べ物の価値

増田 研

友人・知人と会って、たとえば「来月エチオピアに行く」といったような話になると、彼らから、エチオピア人は何語を話しているのか、であるとか、治安は大丈夫なのかといった質問をされることが多い。でももっとも多く受けるのは「どんなものを食べるんですか」という質問だろう。こういった経験は私だけではなくて、海外へ出かける人類学者のほとんどが持つのではないだろうか。

これがアメリカやイタリアの食文化についてであれば、そのおおよそは日本の人々にもよく知られているし、想像力を働かせる素地もだいたいそろっているので発展的な話題として十分成立しうるのだが、いかんせんエチオピアである。友人たちはエチオピアがどういうところかほとんど情報を持ち合わせていないことが多いので、食事についての質問をされれば、まずいろいろな食品が存在すること、それがどのようなものであってどのような文化的背景を持つものなのかをひとわり講義しなければならなくなる。こちらとしても多少の身構えが必要だが、もちろんせっかく尋ねられたことでもあるし、相手がそれを知りたいというのであるから、少々面倒な説明も厭わない。

いずれにせよ国や地域が異なれば文化もちがいが、したがって食文化も異なるという認識が存在する以上、異文化の話題に食事ネタが付随するのは当然である。

同様のことは当のエチオピアについてもいえる。とくにアジス・アババなどの「都会」の人々は、わたしが行くような辺境の様子についてはまるでイメージを持ち合わせていないらしく（たとえば、やつらは服を着ているのか、なんて聞いてくるありさまです）、調査地であるパンナでのわたしの健康を気遣ってか、なにかのうちに食事について質問されることが多い。そして「パンナにはインジェラはな

い」というそのことだけで、いきなり最前線に送られる不運な初年兵をみるような情け深いまなざしで私を見るのだ。（バナナだけではない。ある人々にとっては、日本にもインジェラがないということが、驚愕に値することだったりするのだから）。

さて、エチオピアでひろく食されているのはご存じのようにインジェラとワットの組み合わせになるものだが、これは一般に流布しているような「国民食」などではない。「国民食」といえば、たとえば「日本では米が主食である」と言明することで、日本語を話す日本国籍人ならばみな米を食うのだとイメージさせる、あの日本の米幻想に似て、エチオピア国民であれば誰もがインジェラを食べているというような印象を与えるが、そのようなことは断じてない。たとえエチオピアの領土内に住んでいたとしても、インジェラを見たこともなければ食べたこともない人はたくさんいるからだ。

それに「国民食」という物言いは、ちょうど中国における「人民服」のように、それを食べる（着る）ことがエチオピア「国民」としての証しであるかのような響きをもっている。ステーキやコトレット（カツレツ）などの洋食（この言い方も問題だけれど、ここでは置く）とインジェラを両方そろえている（国営ホテルなどの）レストランなどでは、インジェラとワットの組み合わせは「トラディショナル・ディッシュ」とか「ナショナル・フード」といったカテゴリーに納められているのである。こういった物言いがまかり通っている以上、インジェラではないそのほかの雑多な食べ物たちはわきへ押しつけられてしまうことになる。そういうナショナルな食べ物としての位置づけを与えられたインジェラは、ある意味で政治的な記号をまともなわきへ押しつけてしまっている。いってみればインジェラは、まさにこの点において逆説的に「国民食」なのである。

たしかな証拠があるわけではないが、南部地域にはエチオピア「国民」としての自覚を未だ確立していない人々がたくさんいるはずである。わたしの調査地のバナナの人々などはさしあたりその例としてふさわしい。かれらもちろん（ブルという貨幣を用いて）税を支払ったり、（国家権力の最前線としての）警察のごやっかいになったり、ごく少数ではあるけれど子供を（公立の）学校へやったり、ある時期には（政府軍の）兵隊にとられて前線に送られたりと、さまざまな回路を伝って国家とのつながりを持っている。ところが、たとえば国家の中心部にいる人たちが、インジェラという名の薄焼きクレープがエチオピアの版図のあちこちで食されているというような事柄を手がかりに「国家としてのエチオピア」を想像するようには、バナナの人々はエチオピアを想像し得ないと、私は思う。かれらの想像がおよぶのは身近にあるエチオピア的なもの（たとえばインジェラ）や、ごく少数の誰かがかつて行ったことのある遠いどこか（たとえばアジス・アベバ）であって、そこから想像の共同体としての「エチオピア」を浮き立たせることはそんなにたやすくはないはずだ。

あるとき数名のバナナの青年たちと、日本のことを話していた。この青年たちはバナナでは非常に少数であるところのキリスト教徒だ。だからではあるが、聖書を読むために（国民言語であるところの）アムハラ語を話すことができ、多少は学校教育もうけている人たちである。したがってこの青年たちは、自分たちはバナナ人であると同時にエチオピア国民でもあるという自覚を多少なりとも持ち合わせているといつてよからう。その彼らがエチオピアとバナナと日本の位置づけについて議論をはじめた。わたしたちは国家としてのエチオピア、その下部に位置づけられる周辺民族としてのバナナ、というような階層的な考え方に慣れきっているが、一般のバナナ人にはこういった思考のスタイルはリアリティを欠いているように思われる。この議論の時には、これら青年たちの間で、こうした国家とバナナとの間に階層的關係（あるいは部分/全体関係）が存在するというところで議論がまとまったのであるが（私が誘導したわけではない）、しかしこうした理解に達するということは、実は国家の中に取り込まれ、下位におとしめられた自分たちを再発見することにもなるのである。しかもその発見の枠組みは、

実はアムハラ語による学校教育から与えられたものであるという点に、二重に折り畳まれた周辺民族の現在がある。

こうしたバナナの人々にとって、インジェラはアジス・アベバのレストランが外国人向けに発信するのは異なる意味で、まさにナショナル・ディッシュとしてあらわれてくる。

さて、インジェラも食べられないバナナの村で、私が何を食べていたかということ、だいたい穀物（モロコシとトウモロコシ）、サツマイモ、そしてミルクである。たまに何かの都合で屠られたヤギ肉にありつけるが、たまに、である。ミルクは脱脂されていることが多いので、総合的にいうと油脂の少ないダイエットフードが中心ということになるだろう。

1998年の夏にはわたしは自前の食品をほとんど持たずに、ほぼ100パーセント彼らからの施しに頼って生きていたから、時刻の一定しない食事のサイクルに、ときには無性に腹を空かせ、ときにはつぎつぎと詰め込まれる食事に煉獄のような（満腹の、ときに腹痛の）苦しみを味わいつつも、健康状態はたいへんに良好であった。わたしは元来が胃腸の強い方ではないので、あっさり何の抵抗もなく食べられるバナナの食事は大変ありがたい。むしろインジェラ食を続けている方が腹をこわす率が大変高い。私の同伴者（女性）は、バナナにいる間は便秘から完全に解放されて、とてもさわやかな顔をしていた。

もちろんわたしはインジェラが嫌いではない。それどころか、しばらくバナナにいて身体からすっかり余分な脂が落ちてしまったときなど、ワットに含まれる濃厚なバターが存在が、一種の「乾き」ともいえるものを癒してくれさえするのに感謝したものだ。だから私にとっては、「町の食事」と「村の食事」のあいだを適度に往復するのが、肉体的にも精神的にもちょうどよいのかもしれない。

ところがバナナ出身の、現在は町に住むエリートにとっては事情は違うらしい。たとえば私の友人であるD君だ。D君は高校生だった頃はわたしの調査を手伝ってくれ、いまでは出世して地方行政区の長になってしまったが、彼など、自分はもはやバナナの食事では生きていけないと宣言している。私が「毎日バナナの食いで満足しているよ」と話すや、ひゃーっと叫んで頭を抱え、あんたたちファランジ（白人）はまったくすごい、おれにはできん、と尊

敬のまなざしをもって私を見たりする。バナナの食いは「悪い」、とはっきり口にしたこともある。何がどう悪いのだからはっきりしないけれど。

もう一人、この人は私の父親くらいの年齢で、ある事情があって都会での生活が人生のかなりの部分を占めてしまった人物だが（仮にBさんとしておく）、彼なども「もはやバナナの食事では生きていけない人」になってしまっている。Bさんは、アジス・アベバ在住の、バナナのことなど何も知らない都会のひとつに、バナナの食いはうまいぞ、ヤギ肉なんか塩をつけなくても美味しく食べるんだ、と景気の良いふるさと自慢を繰り広げていたのだけれど、私と一緒に村に来てみたら、やっぱりバナナのスタイルでは満足できならしく、ヤギのローストには塩とバルバレ（トウガラシ）をつけ、もらった肉でスープをつくり、機会をとらえてはインジェラの具みたいなものを作ろうとした。おまけに村での生活が一週間、二週間と進むに連れて目に見えてやせ細っていき、体力も気力も弱ってしまった。アジスアベバに残してきた子供たちのことが気がかりで、ホームシックにも陥っていたのだろう。このまま放っておくのも気がひけたので、早めにアジス・アベバに返したが、彼の場合、肉体的・精神的に、本当に「バナナの食事では生きていけなかった」のである。別にBさんの言行不一致を責めるつもりはない。本当に、それはしょうがないことだったのだ。

これら食事をめぐる出来事の背景に問題があるとすれば、それは「食いの価値」についての力学がどこかで働いていることではないだろうか。力は政

治的なものだけではなくて、それぞれの固有文化に関するあらゆる局面におよんでいる。たとえば「黒人たちは服を着ていないんじゃないか」といった思いこみがアジス・アベバに存在するように、エチオピア「国民」たちによる南部諸民族にたいする無知と偏見は、文化の価値をめぐるヘゲモニーに影響され、なおかつそれを強化・維持させているように思われてならない。そんな中でまた、D君のいうような「バナナの食いは悪い」という言明とおなじ価値観を、村に住むバナナの人々も持ち始めていることに、わたしは戸惑わざるを得ない。同時にある局面において、町のやり方は悪い、自分たちのやり方こそが正しいと、「伝統主義者」のような振る舞いを見せることにも気を配らなければならない。その首尾一貫しない言明と行為はいったいどこから来るのか。

現時点においてバナナの社会と文化が危機にさらされている、ということではない。しかし国民としての自覚の有無にかかわらず、彼らの生活の中に国家は確実に入り込んでいる。それは長い時間をかけて、さまざまな入り口・隙間から忍び込み、彼らの生活を変質させていく。そういった現象を解明するために、役所や警察や酒場が囲い込まれた「町」という場は、おそらく重要な観察ポイントとなるであろう。エチオピアの周辺を見ていく者として、エチオピア南部においてこれまで欠落していた「都市を見るための視点」をどのように整備していったらよいものか、考えるべき時に来ているのではないか。

（ますだ けん 民族学振興会研究員）